

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在
4. 聖書から経済・政治・社会
5. キリスト教と経済学説
 - 5-1：ウェーバー・テーゼをめぐって
 - 5-2：近代経済学と神学——アダム・スミス
 - 5-3：キリスト教・資本主義・社会主義——賀川豊彦

< Exkurs >

1. 思想史研究の可能性——近代日本キリスト教思想研究から
2. 脳神経科学と宗教

1/20

6. キリスト教と政治理論 → 2012年度へ
 - 6-1：現代思想のパウロ論
 - 6-2：イデオロギーとユートピア 1
 - 6-3：イデオロギーとユートピア 2

< 前回 > 賀川豊彦**(1) キリスト教と社会主義**

0. 聖書と社会教説、資本主義か社会主義か。
 - ・トレルチ『社会教説』
 - ・開かれた食卓と愛の共産主義、古代資本主義（ローマ帝国批判）・ヨハネ黙示録
1. 社会主義：近代の歴史状況を端的に反映した政治思想である。
2. 「社会主義」：近代——欧米諸国による国民国家モデルと世界覇権の形成——以降に登場した広範な諸思想・諸運動を含む理論群に対して用いられる包括概念。
3. イギリスのキリスト教社会主義運動：1848年、J.ラドロー、F.D.モーリス、C.キングスレーらに指導された社会改良運動。信仰に基づき、隣人愛と神の前の平等というキリスト教的理念の社会的実現を目指す。
4. イギリスを超えて同時代のアメリカやスイス、ドイツなど。
5. アメリカの社会的キリスト教。1880年代の神学運動
7. 片山潜らを介して日本におけるキリスト教社会主義
8. 明治期の日本キリスト教は近代日本の政治・社会的状況との関わり
10. 近代日本の状況→キリスト教信仰と社会主義思想の両方を保持し続けることの困難
片山潜、石川三四郎、安部磯雄、木下尚江ら

(2) 賀川豊彦の「友愛の政治経済学」

0. 賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、2009年。Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.
 3. 「第2章 キリストと経済」
 - 「I 主の祈り」
- 「ある人々は、キリスト教の真の実体は全く宗教的であって、経済生活と何の関係もない、

と言う、「もちろん」「違いはある」、「しかし、キリストはそのような態度をとってはいなかった。彼はしばしば、経済の基本的な事柄を取り扱っている」、「食事」「食卓」「日ごとの糧への祈り」(34)、「すべてのことが、主の祈りの6項目に含まれている。その中で、キリストは経済について素晴らしい教えを与えてくれているのだ」(36)

「II 価値の7要素」

「客観的世界と絶対的世界のあいだに、自然と神のあいだには、七つのチャンネルがある。生命、労働（またはエネルギー）、変化、成長、選択、秩序（または法則）、目的がそれである。これらはあらゆるタイプの経済に通じる価値の7要素である。キリスト自身が価値のこれらの七つの要素への基本を私たちに示してくれている」(37)

「III 十字架の愛と経済の価値」

「イエスの宗教の偉大さは」「彼の意識が神ご自身のそれと一つであったこと」、「人間のあり得る全てを体現したことであった」、「イエスの十字架は、神の愛と人間の愛の完全な融合を示したものである」「贖罪愛」、「神の視点から捉え、人類を救済する神の責任の重荷を共にしたのである」、「私たちはここに個人的価値運動と社会的価値運動の完全な一致を見出す」、「キリストの贖罪愛は社会全体を救うための個々人の魂の救いを意味する」、「十字架の愛は経済の価値の七つの要素をすべて含む」(42)

「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」(46)

「IV パウロの経済価値の観念」

「今日、多くの教会はその贖罪愛をもっぱら信条的なものとして保持することによって、楽な思いをしようとしている」(52)、「残念ながら、教会組織の大半は、不当利得社会の特権階級に依存している」、「キリスト教会の存在がなぜ脆弱で、現代世界の騒乱になかで教会がなぜ無力なのか、を明らかにする」(53)

4. 「第3章 唯物論的経済観の誤り」

「I 唯物論的経済観の無力性」

「マルクスは、経済学を自然科学として取り扱うことができると考え、すべて唯物論的決定論で分析できるとする特殊な方法論を擁護したのである」、「この時期、経済学者と同様に、神学者も、経済学は自然科学の領域に入れられるべきだと考えていたのだからである」「経済行為は、人間の意識の発展レベルとともに変化する、と私は信じる」、「1国の文化はそう容易には説明されない」(55)、「単なる物質生産様式だけに基づいて文化的社会を定義しようとするのは、大きな誤りである」(56)

「III 心理的経済」

「唯物史観の概念は、従前の社会を説明するのには役立ったかもしれないが、時間を含む心理的経済を取り扱う社会経済的社会の現象を説明するためには役に立たない」、「かくして、唯物論的経済は心理的見解に席を譲っていかねばならない」(59)

「IV 身体、感覚、意識の経済」

「「身体経済」は「感覚経済」に進展する」、「「感覚経済」は「「意識経済」と呼ぶものに進展する」、「人間の関心は感覚的満足のレベルから知的レベルへと進む」

「V 資本と労働」「VI 原始的文化の精神的基礎」「VII 機械文明史の唯心史観」

「VIII 宗教的価値と経済的価値の結合」

「共産主義と科学的社会主義はともに、宗教的な概念に関わるある宇宙観を持つ」、「さまざまなイデオロギ」の創始者や賛同者は、それぞれの仕方、宇宙におけるある種の宗教的価値の形態を追っていることを、見落としてはならない、「彼らのうちに宗教のある面への類似性を見ることができよう」「唯物論的経済学と唯心論的経済学」「本質的な違いは」「一方が決定論的宇宙観を選び、他方が可能性への信仰に基づく目的論的見解を選ぶところにある」(70)

5. 「第4章 変革の哲学」

「I 暴力革命」

「暴力革命が、経済革命を遂行することに失敗した七つの理由」(71)

「II 経済革命」

「人間の意識の革命」「所有権や相続や契約権と関係のある富や職業に関する理念に根本的な革命が生じなければならない。これらの考えの革命が宗教的意識に基礎づけられ、それが社会的意識を構成するまでに発展するときに、経済革命ははじめて完全に実現される」(74)、「真の経済革命は、キリストにおけるごとく、いのちについての目覚めた意識が社会化されるときにのみ達成される」(76)

6. 「第5章 世々を貫く兄弟愛」

「I 愛の実践」「II 修道会」「III ゴシック建築とキリスト教的兄弟愛」「IV 再洗礼派の運動」「V プロテスタント自由主義」「VI キリスト教的友愛の経済実践」

7. 「第6章 現在の協同組合運動」

「I 開かれたコミュニティを」

「現代の協同組合は、中世の組合（ギルド）の延長線上に改良され発展してきた」、「中世のギルド」「その組織は非組合員にまで兄弟愛を及ぼすことはなかった」、「真の協同組合の基本原則の一つはそのサービスをコミュニティ全体へ広げることである」(87)

「II ロジデール・システム」「III ライファンゼン・システム」「IV 日本における協同組合運動」

「V 強制協同組合」

「収奪の無い計画された経済の体系」、「徹底した教育運動から始めなければならない」、「意識的な自覚と自発的な行動なくしては、協同組合運動は達成されない」(93)

「VI 協同組合運動に対する反対」

「移行のプロセスは、だれにも苦難を及ぼさないよう、極めてゆっくりとしたものとなるだろう」、「資本主義的なやり方から協同組合の方式へと、考え方を変えなければならないのである」(96)

「VII 精神的運動としての協同組合」

「協働組合経営は組合員の宗教的な社会意識の目覚めに依存するであろう」(98)、「友愛意識の復活、キリスト教的兄弟愛の復活」(99)

8. 「第7章 兄弟愛の行動」

「今日存在するのは資本主義である。資本主義は無限に自然資源がある間はまだよいが、私たちが自然の資源を使い果たしてくると、悲惨と金婚の恐ろしい状態が起こる。そうになると、生活を護り、経済状態を適正に公正に調節していくために、兄弟愛の運動が不可欠となる」(103)

10. 「第9章 友愛に基づく世界平和」

「縮小してゆく地球上で国民間の争いを続けるのは不毛なこと」(148)

「宗教的対立によって惹き起こされた戦争もあった」、「世界平和に対する脅威として現存する状況は大部分が経済的なものである」「人口過剰」「自然資源の欠乏」「国際金融の問題」「貿易政策の摩擦」「輸送政策の摩擦」(149)

「最近の農業不況の原因は、食物の生産過剰によるものであった」、「世界列強がよき隣人国として共に手を結ぶならば、人類が飢えるような事は決してないであろう。誠に残念なことであるが」(150)

「猜疑心」「軍備に莫大な支出をしている」、「私たちの意識において経済がまだ精神化されていないからにほかならない」

「経済活動のすべてを、贖罪愛の意識的行為によって浄化し合理化すること」(159)

「世界の経済体制を「協同組合化」する努力をいまずぐ始めよう」(160)

< Exkurs >

1. 思想史研究の可能性——近代日本キリスト教思想研究から

「アジアと宗教的多元性」研究会 (1月21日)

「思想史研究と評伝——近代日本のキリスト教思想研究から」

1. はじめに：波多野精一研究に向けて
2. 思想史研究の現在
3. 評伝研究とテキストの脱構築
4. むすび：思想の現在を問うとはいかなることか

(1) 思想の時間性・歴史性

0. Paul Tillich, *Die religiöse Lage der Gegenwart* (1926), in: *MainWorks* 5, de Gruyter, 1988.

Darum geht es jedem, der von der Gegenwart reden will, unvermeidlich so, daß er von der Vergangenheit redet der näheren oder ferneren und daß er von der Zukunft redet, der fernsten oder der nächsten. So hätten wir denn drei Antworten auf unsere Frage nach der Gegenwart: Gegenwart ist Vergangenheit, Gegenwart ist Zukunft und Gegenwart ist Ewigkeit. Diese drei Antworten wollen wir zunächst betrachten. (28)

Und die Gegenwart erkennen, heißt, ihr Ja und Nein zur Vergangenheit, der näheren und ferneren, begreifen. (29)

Und nun die zweite Antwort: Gegenwart ist Zukunft. Alles Leben im Gegenwärtigen ist ein Gespanntsein auf das Zukünftige; jede Gegenwart ist wesentlich ein Schreiten aus der Vergangenheit in die Zukunft. Geist ist immer Gerichtetsein von dem, was ist, zu dem, was sein soll.

Wer aber vom Lebendigsten der Gegenwart reden will, also von dem, worin sie zeugungskräftig ist, der kann es nur, insoweit und insoweit, wie er selbst eingetaucht ist in diesen schaffenden Prozeß, der aus der Vergangenheit die Zukunft werden läßt. (29)

Ohne ein Fünkchen dieses Glaubens kann kein Geist; denn geistig leben heißt doch im Sinnvollen leben, und ohne einen letzten Sinn versinkt alles im Abgrund der Sinnlosigkeit. (29-30) ... Hat irgendeine Gegenwart Sinn, so hat sie Ewigkeit. Nur weil Gegenwart Ewigkeit ist, hat sie eine Bedeutung, die sie wert macht, betrachtet zu werden. --- *Und so können wir unsere drei Fragen zusammenfassen und nach dem Ewigen fragen, das in der Gegenwart aus vergangener nach zukünftiger Verwirklichung drängt.* (30)

Träger des Daseins der Gegenwart als geschichtlicher Wirklichkeit ist die Gesellschaft; sie ist das Daseiende im Sinne unserer Fragen und Betrachtungen. Eine religiöse Lage ist also immer zugleich die Lage einer Gesellschaft. (31)

(2) 思想史研究再考

1. ドミニク・ラカブラ『思想史再考』平凡社。(Dominick Lacapra, *Rethinking Intellectual History. Texts, Contexts, Language*, Cornell University Press, 1983.)

1. 序論：

「思想史において機能してきたようなコンテキストの標準的な見方」(10)

「歴史理解の問題を極端に単純化してしまう抽象的カテゴリー化の様式として機能」

「こうしたコンテキスト化のレトリックがしばしば、ひどく史料主義的な読みを促してきたことは事実である。この読みにおいては、テキストはたかだか時代を示す指標、あるいは

はまた、テキストよりもなにかもっと大きな現象が直裁的に表現されたという程度の代物になってしまうのである。」

「本当の意味ではまったくテキストを読まないことへの言い訳」(11)
(テキストの意味・解釈→「テキスト—コンテキスト」)

「テキストというものがそれ自体閉じられた宇宙であり、また偉大な芸術は自己目的的なものであるという概念と容易に結びついた。歴史家がテキストを単なる史料に還元したように、文学批評家や哲学者は歴史を背景的情報に還元した。」(11)

「文学批判や哲学は現在、自己反省的、自己批判的な理論のいわゆる「重工業部門」をなしている。思想史家が自分たちの分野の諸問題と折り合いをつけるための手段としての概念を手に入れることができるのであれば、それはおそらくテキストの読みに関する理論の発展が最も強力なたちで現われているこれらの隣接領域を探究することによってである。」(12)

(テキストは目的か手段か)

「歴史記述という領域の中の下位分野としての思想史」(14)

「一般に受け入れられている対立関係を不安定にする傾向」、「一方で、自分たちの行為（あるいはテキスト）が、次から次へと発生する事件の大きな流れの中でどういう「結果をもたらすか」知るすべもない歴史的行為者たちが（おそらく）存在する」、「その他方では、物語を回顧的再構築の一方法として利用する歴史家がいる」(14)「「追跡可能な」物語へと諸事件を筋立てていく」「過去にたいする批判的距離を保証し、確固たる語りの声の客観的権威を高めてくれるような」(15)

「史料にもとづく知識と一対をなすものとして、過去とのより「対話的な」関係を強調することは、歴史の行為者と歴史家との間の対立関係の緩和に役立つ意味を少なくとも二つもっている」(15)

「過去とは単に、語られるべき、完結した物語ではなく、個々の歴史家が語りを行っている時代と結びついた過程であること」

「歴史家というものは、あることがらが、それが生じた時代に意味していたことと、現代のわれわれにとって意味することとの両方を、理解しようとする営為に没頭する。解釈なるものが最も魅力を発揮する領域」(16)

(テキストを通して過去へ、過去との対話、歴史学。解釈学)

「テキストとコンテキストとのかかわりという問題から思想史を再考しようとする、どうしても言語の問題が発生してくる」、「言語は表意・行為圏」「人間生活におけるほかの表意行為と結びついたものである」、「言語がテキストとコンテキストの二項対立性を弱め、両者の、時として両面価値的な相互作用を強調する。思想史がなにもものかであるとするれば、重要なテキストを構成する、具体的状況の中での言語使用の歴史である。その意味で、言語の問題に関係するものはなんであれ思想史と無縁ではない」、「ひとつの重要な表意行為」「の中に、またそれを通して、出現する人間存在の可能性と限界をもっともよく理解すること」(16)

(言語主義)

「「テキスト」概念のもつ批判的役割は、伝統的な区別や階層秩序を問題化することである」、「テキストを」「土台、現実、あるいはコンテキストの単なる史料であり指標である

にすぎないとする伝統的なテキスト観が怪しくなるのだ。とはいえテキスト（あるいはテキスト性）という概念を、関係の網状組織を究明するために使用すると、「テキスト帝国主義」とか「汎テキスト主義」という化け物が飛び出すのはどうしても不可避的なことである」

「社会的生活にしる個人的生活にしる、これをテキスト」「と呼ぶことは、明らかに隠喩の使用である」、「言語のインフレ」、「危険は冒してみる値打ちが充分にある」(17)

(汎テキスト主義)

「現在、論文＝書評が独立したジャンルとして特に目につくようになってきている」(18)
「批評的言説は問題」「にとりくむと同時に、それらの問題を扱っている他者たちの言葉にもとりくむという点で対話的である」、「論文＝書評はまさに、研究とは過去の重要なテキストを媒介とする過去との対話にほかならないとする人文科学的な理解の具体化であると同時に、異議申し立てを受け、再概念化を余儀なくされている学問分野においては欠くことのできない重要な広場でもあるのだ」(19)

「事実認知的な言語使用と修辭的な言語使用（史料主義的な言語使用と遂行的な言語使用）との間の関係」、「学問の修辭法」(19)

2. 第一章 思想史再考とテキストの読み：

1. 思想史再考とポストモダン→二元論・分裂（視点と方法の）を超えて

「この十年間思想史家たちは、自分らの専門領域が、改めてその本質や目標を問い直さねばならないほど、重大な危機に直面していると信ずるようになってきた」、「いったい自分たちのやっていることはどういうことであり、またそれはなぜなのかに関してはっきり言明するように迫った」、「外圧」、「この思想史という領域、特に近代ヨーロッパ思想史という領域にたいする研究方法では最も成果に富むとわたしとしては考えているものを比較的理論的な観点から定義し、かつ擁護する」(22)

「思想史研究の歴史」「様々な見方」

「内的あるいは内在的観念史」、「外在的あるいは「コンテキスト」的な思想史の見方」、「内的な見方と外的な見方との統合をめざすもので、たいていのばあい「人と思想」の物語というかたちをとっているもの」

「思想史は、ますます些末化していく問題を取りあげ、これに内的方法を適用することによって狭義の専門化に陥ったり、時には好古家的にさえなったりする傾向が一方にあり、あるいはまた、「人と思想」の冒険を物語ることによって、ほとんど無限に、啓蒙的・入門的レベルに固着しつづける傾向が他方にある。これらの問題にたいするひとつの解答は、近來とみに精緻化された観念の社会史によって出されたように思われる」、「その厳密化と方法論的洗練性において古い形態のコンテキスト主義をのり越えているからであり、また現代の社会史の瞠目すべき成果へと思想史を接近させることを約束している」、「とはいえ思想史を、単なる社会史の関数とみてはならない」(23)

「思想史と社会史との関係性」

「思想史の限界」「思想史と他の見方との関係」、「思想史とは」「諸学横断的な学問」

「わたしが活性化したいと思っている問題関心の中心は、複雑なテキスト——使用の伝統に属するいわゆる「偉大な」テキスト——の読みと解釈の重要性、ならびにこれらのテキストを、これに関係するさまざまなコンテキストに関連づけるという問題を定式化することの重要性ということである」(24)

（観念の歴史、評伝、社会史）

「テキストがしばしば極度に還元主義的な解釈の対象となってしまう」(24)

「歴史的な理解なるものについての史料主義的なとらえ方が支配している」、「一切の対話の軽視」(25)

「「内部」と「外部」の概念を再考すること」、「もろもろの表意行為間の相互作用の問題」、「人は「つねにすでに」その問題に巻き込まれていること」、「意味の可能性ならびに意味の限界の問題」、「言語使用、言語外の表意行為、ならびに表意作用過程と結びついたさまざまな人間活動様式相互間の関係如何という問題が、どのようにテキスト性という概念によって明らかになるものとなるかを調べること」、「史料に基づく過去の再構築と過去との対話との関係如何の問題である」(26)

「ハイデガーが伝統の「未思惟の思考」と呼び、デリダが「脱構築」と呼ぶものの中で提起されたタイプの問題」、「歴史的伝統の中で隠蔽されたり抑圧されたりしているものを復権させ、さらに、これら隠蔽され抑圧されているものを、現在支配的形態をもって有害な働きをしている諸傾向ともっと対等に「競わせる」ことによって、あの歴史的伝統の行き過ぎを夢遊病者のような反復するのを回避しようとする批判的探究である」(29)

（脱構築）

「テキストの史料的傾向と「作品的」側面を区別すること」(29)

「「史料」も「作品」もともに史料的な要素と作品的な要素との相互作用をともなうテキストなのであって、その相互作用は、批判的歴史記述の中で検討されなくてはならないものである。」(30)

「「他者」との対話」「生産的な学問になるかどうかは、「正しい」問いを投げかけるかを含め準拠枠との関連においてのみであり、これらの問いそのものが、決して全面的に対象化されることも、十分に認識することもできないある「コンテキスト」とか「生活＝世界」の中に位置づけられるのである」、「そればかりではない、ハイデガー」、「過去の思想家が意識的に、あるいは意図的に思考することはなかったが、それでも依然として問うに値する彼の「未思惟」を構成しているものを探究することによって初めて過去との対話が、その思想家の思考のうちでも現在と未来にきわめて強い影響を及ぼすような領域に入ってくる」(30)

「ある出来事なり現象が欠如していたとしたら、あるいは重大な変更を蒙っていたとしたらどうなっていたであろうかと仮定することによって」、「変形可能性の理解」、「問いを發する当の人間が、対話の相手たる「他者」によって問い返されることになる」、「歴史家の歴史性は、彼の發する問いと「テキスト」「の中で彼が出す「答え」の双方において問題となる」、「史料的な傾向と作品的な傾向との相互作用によって緊張が生じ、この緊張は制御と排除の過程を通して初めて解除される」(31)

（解釈学・対話モデル）

「社会史はしばしば、概念史を因果論の枠組みと社会的母体なる概念にあてはめるだけで、現実になが引き起こされているか、なにが衝撃を与えているのかを批判的に調査研究しないのである」、「過去の重要な側面であっても「敗退」したかもしれないものを回復再生してみる必要性を歴史記述から奪ってしまうのである」(33)

2. テキストの意味とコンテキスト

「十字路にある問題」「あのテキストと、それに関連のあるさまざまなコンテキストとの関係如何という問題」、「六つの研究領域」(33)

「唯一固有のコンテキストに訴えるということがそもそも錯誤」「コンテキスト」という概念の実体化、「コンテキスト群の相互関係は可変的で問題含み」

「六つの「コンテキスト」とは意図、動機、社会、文化、作品群、構造」(34)

「一、著者の意図とテキストとの関係」

「二、著者の人生とテキストとの関係」

「三、社会とテキストとの関係」

「四、文化とテキストとの関係」

「五、テキストと作者の作品群との関係」

「六、言説形式とテキストとの関係」

3. 過去の再現か現在主義か

「過去の再構築としての思想史と、過去との対話ないし会話としての思想史との区別——この区別は純粋な二項対立として受けとるべきではない」(60-61)

「純粋に史料主義的な歴史記述観はそれ自体、ヒューリスティックな虚構であること」

「純粋に史料主義的な歴史記述の見方は、歴史的なものの歴史主義的な定義としばしば一致する」(61)

「その両極端とは、ひとつは純粋に史料主義的な過去の再現＝表象であり、他のひとつは歯止めなき虚構化や神話化によって歴史の「重荷」からの解放を求める「現在主義的」な探求である。これら二つの極（同一の複合体の部分構成する）との連関では、単なる主観性に還元することのできない活動としての解釈のあり様を強調することが必要である」(63)

(3) 思想研究の一領域あるいは基礎としての評伝研究

- ・思想家と時代状況、思想史的文脈との関わりを叙述する。
- ・思想家の生涯・伝記的事実を実証的に確認しつつ思想形成と思想の発展史を描く。その意味における思想家の全体像の再構成を試みる。
- ・思想家の思想的意義と限界を明らかにする。

2. 評伝研究 1

・ Wilhelm and Marion Pauck, *Paul Tillich. His Life & Thought Vol.1: Life*, Harper & Row, 1976.
ヴィルヘルム&マリオン・パウク『パウル・ティリッヒ 1生涯』ヨルダン社。

・ Erberhard Busch, *Karl Barths Lebenslauf. Nach seinen Briefen und autobiographischen Texten*, Kaiser Verlag, 1975.

エーバーハルト・ブッシュ『カール・バルトの生涯 1886-1968』新教出版社。

3. 評伝研究 2

・ 日本基督教団出版局：「人と思想」シリーズ

「刊行のことば」：「この企画が志しているところは、一方教会の知識層のために啓蒙的な読物を準備し、他方大学の教養課程学生のため、人文系の背景的なまた側面的な読書資料を提供しようとする点にある。端的にいうと、歴史上と現代におけるキリスト教と結びついた代表的思想家の人と思想とを、今日の若い世代の人々の机上におくろうというのが、このシリーズの目的である」

・宮本武之助『波多野精一』

「波多野は平生自分について語ることを欲しなかった。彼は大げさな芝居がかったことが大嫌いであった。そして自分の本領や使命について人前で公言することをはばかった。またその書き残したもののの中にも自叙伝風のもの、ほとんどないと言ってよいであろう。したがって彼自身の記録によって彼の生涯を叙述することは不可能である。」(9)

（「I 生涯と思想的発展」(9-3 頁) が、波多野の生涯について確実にわかることの主要な内容である。宮本は、波多野が様々な人々との間に残した書簡（『波多野精一全集』第六巻）や、関係者の証言を資料として用いている。）

「彼は社会、政治、芸術、ことに音楽などに深い関心と興味をもった。しかし、彼は、学者としての使命を果たすために、自分の努力を学問研究以外のものに向けなかった」、「彼は、その生活を読書と研究と思索と講義と著述という狭い範囲に限定し、その他のことは、それを妨げない程度においてのみ許した。世間的な名声やはなやかさなど彼の眼中になかった。したがって雑誌への執筆や講演の依頼なども容赦なくことわった。」(36)

「彼は学生に対してくり返して宗教的体験を重んずべきことを語り、人格的信念が思索の根底をなすことを強調した。それにもかかわらず彼は、その親しい友人にも、また彼のもとに集まる学生にも自らの信仰について語る事がなかった。彼は、自分の信仰は心の中に秘めおくべきものであって、これを外部にあらわすものではないと考えていたようである。信仰は、神との交わりであり、霊魂上の事柄であって、他人には黙すべきものという意見を彼は堅持していたようである。彼は教会に籍をおいたが、礼拝にはほとんど出席しなかった。」(38)

・清水書院：「人と思想」シリーズ

関根正雄『内村鑑三』

4. 評伝研究 3

・講談社：「人類の知的遺産」シリーズ

・中央公論社：「世界の名著」「日本の名著」シリーズ

5. 雨宮栄一：評伝シリーズ、新教出版社。

・『青春の賀川豊彦』『貧しい人々と賀川豊彦』『暗い谷間の賀川豊彦』2003-2006年。

・『若き植村正久』『戦う植村正久』『牧師植村正久』2007-2009年。

「ところがこのような巨大な人物であるにもかかわらず、正久の生涯全般に関して、また人物像の全体に関して立体的に描き出す評伝は不思議に無い。もちろん後に触れるように、個別の優れた、また貴重な研究書は少なくない。そのほとんど全てが個別的なテーマを掲げて、その視点から正久の業績、あるいはそのテーマとの関係を問うものである。しかし彼の全体像を、歴史的に、しかも立体的に描き出すことを志向した「評伝」は、いかなる事情によるのか刊行されていない。何故であろうか。どうも分からない。ただ少し考えてみるといくつかの理由はある。この「序に代えて」では、正久の評伝が書かれなかった理由の解明を試みたい。これが主題である。しかしこのことは同時に、今日、何故、正久の評伝が記されるのかという積極的な理由を提示することにもなる。従ってここでの本当の主題は、「今日、何故、正久の評伝か」ということになる。」（「若き」12-13）

・『評伝 高倉徳太郎 上』『評伝 高倉徳太郎 下』2010-2011年。

「この書物は高倉徳太郎の評伝である。単なる伝記でもなく、さりとて各論的な思想研究でもない。徳太郎の伝記や神学的研究は少ないが、筆者がここで記そうと願っているものは、徳太郎の信仰的・神学的な評伝である。彼のおかれた日本キリスト教史上の位置とその具体的な歩みに即しながら、あわせてその思想の展開を論ずる」（上、13）

（4）まとめ

- ・ 研究対象への距離 → 過去思想、地平融合
- ・ 過去の過去：思想史における思想、過去の問題連関において
- ・ 過去の現在：思想家の意図・問題意識→評伝の意義、社会史、そしてテキスト自体へ
- ・ 過去の未来：未完の意味の可能性→脱構築、知の考古学

<参考文献>

1. Paul Ricoeur, *Temps et récit*, Tome I(1983), II(1984), III(1985), Seuil.
2. 磯前順一「〈日本の宗教学〉再考——学説史から学問史へ」、日本思想史懇話会編『特集——近代日本と宗教学：学知をめぐるナラトロジー』（『日本思想史』no. 72、2008.）ぺりかん社。
3. 松山壽一『ニュートンとカント 力と物質の自然哲学』晃洋書房。
「本書の以上のような諸解釈を方法論的に支えているのは概念史的研究法である。ここに概念史的研究法とは、主題とする概念を含んでいるオリジナルな諸テキスト、一次諸文献を直接研究し、それらを比較照合しつつ、テキスト間の連関、つながりを推測し、それに基づいてテキストの文言を解釈し、当の文言、概念の成立、変遷、発展を跡づけるものである」(iv)。
4. トレルチ『古代キリスト教の社会教説』教文館。
「序論と方法論上の予備的諸問題」
「以上でもってわれわれの研究に対していくつかの方針が与えられる。われわれは至るところでまず第一にキリスト教の固有の社会学的理念の構造及び組織について問わなければならないであろう。」(31)
「第二には、この社会学的な形成物と社会的なるもの即ち国家、経済的一分業社会及び家族との関係について問われねばならないであろう。」(32)
5. Stefan Collini (ed.), *Unberto Eco. Interpretation and overinterpretation with Richard Rorty, Jonathan Culler and Christine Brooke-Rose*, Cambridge University Press, 1992.
6. 安酸敏眞「「思想史」の概念と方法について——問題史的研究の試み」『人文論集』（北海学園大学人文学会）46号、2010年、97-145頁。